Unique & Exciting キャリア編

髙木 誠利
1980年電波通信学科（R）入学
文化放送ディレクター・プロデューサー

ラジオ制作（ディレクター・プロデューサー）と技術評論家の二刀流人生

調布ネットワークをお読みの皆さん、こんにちは。私は現在64歳、ラジオ局の文化放送に勤務しています。電気通信大学は専門家を作り出す大学ですから、普通、誌面を飾るのは「道を極めた専門家・達人」ではないかと思いますが、私は間違いなく道を極めていません。でも電通大にはこういうOBも居るんだ！、という優しい心で経歴話を聞いていただければと思います。

電通大を志願した理由

アマチュア無線の試験の願書を出したのが小6の時、4月をまたいだ中1で最初の無線従事者免許証を手に入れました。私の通信との付き合いはこの時からです。大学を選ぶ際にも「通信」を教えてくれる大学を探しましたが、どこも電子工学や情報通信ばかりで、本当に純粋な通信を専門分野に持つ大学は全然見当たりません。そこで選んだのが電通大。当時の学科名は電気通信学部電波通信学科！ 通信のプロになれそうな気がしませんか?。

学生生活

あまりまじめな学生ではありませんでした。数学は苦手でしたし実験のレポートはとことん手を抜く（でも全部優）学生でした。アルバイトもいろいろしましたが、一番役に立ったのは業務用ビデオのシンクロナイザー、つまり編集用タイミングマシンの設計補助の仕事です。回路の設計法を学べました。卒業研究は中波大電力放送が海上移動通信に与える影響。クラスメートのA君との共同研究で、私は通信機の特性の問題、A君はラジオ局の置局と免許の観点からレポートをしています。船の通信機に突っ込みを入れた私はラジオ局へ、ラジオ局の配置の問題から切り込んだA君は船会社へ就職しましたが、これは偶然です。船酔いの問題さえなければ私も船の通信士になっていた筈ですから・・・。

就職

予想通りの船酔いに苦しみながら貨物船での乗船実習を終えた時には大学推薦の就職試験シーズンは終わっていました。そこで研究室の宮坂教授に相談したら文化放送が募集をしているということで応募。あっさりと面接3回で採用になります。とにかく入ってしまえばこちらのもの。と思ったらなんと、待っていたのは防人同然の職場でした。

雑誌デビュー

技術採用なのでそのまま技術部へ、そして送信所勤務となりました。当時有人の送信所は他局ではNHKの菖蒲久喜だけ。菖蒲久喜は研究所ですがこちらはただの留守番です。当然〝辞めてやる〟となりますが、上司から戻ってきたのは「何をしていても良いから居てくれ」という言葉でした。そこで周りを見渡すと工作機械や測定器があるではないですか。これ幸いとオリジナル回路の無線機を作り、無線雑誌に投稿したら即採用！ この後の経緯はよく覚えていないのですが、しばらくしてハムジャーナルという季刊誌で「HF機（短波の無線機）100％ガイド」という連載を持つようになりました。会社員そして時々雑誌ライターという生活の始まりです。

技術部員として

電通大卒業生が即戦力として重宝されるのは皆さん御存じの事と思います。防人勤務の間にもAMステレオ放送実験場の常駐員をやりましたし、本社へ戻ってからはスタジオの設計から始まってラジオの世界のあらゆる部分をいじっています。一つ特筆するとしたらモバイルスタジオ（写真）の開発でしょうか。NTTドコモさん、NECさんと組んで3G携帯の同期64k回線を使った高音質中継装置を作ったのです。この作業の途中で当時社会問題になりかけていたある3G回線網の問題を解決しましたし、この中継装置はほぼ全部のラジオ局に導入していただきました。レポーターが絶叫しても聞き取れる音声回路が自慢で、ここは自分で回路図面を引いています。

モバイルスタジオ

音響ミキサーとしてもいろいろ仕事をしています。バンド2組が続けて演奏する音楽番組を毎週一人で担当した時はさすがにきつかったのですが、良い経験になりました。またテレビを含めデジタル放送の規格制定にも関わっています。規格書TR－B24に最初に追加された外字の中に「はしご高」がありますが、もちろんこれは偶然です。技術時代の話はインタビューの形である本に収められていて、私のページはサンプルとして今でもネットで公開されていますので「高木誠利　飛鳥新社」で検索してみてください。

制作部への異動

会社がビルを建て、完工後10日ほどで新社屋を稼働させました。スタジオ内部以外の放送設備はすべて私の担当です。機械が新しくなると設計担当は暇になると思われたのか、電力設備を地下2階から屋上に移動させて建設費を増やしたのがまずかったのか、原因は不明ですが、1年後に突然、制作部への異動となりました。

ラジオ局では技術系社員が研修のような感じで1～2年間制作現場に出ることはよくあります。私もそうかなと思っていたのですが結果的には片道切符となりました。気が付けば技術職20年、制作現場20年です。

現在は生放送1つと4つの録音番組を担当しています。生はニュースワイド。CUE振り（全体進行管理）ディレクター（D）です。外部スタッフを使う場合も多いのですが社員Dだとギリギリまで自分の権限で進行を変えられるというメリットがあります。録音番組は音楽番組から雑談ものまで幅広く、プロデューサーとして「置物」になっていれば良いものから、自分で編集をしているものまであります。

今の立ち位置について

60歳を超えて嘱託社員に変わった時点で完全に文系扱いに変わりました。でもいまだに技術職としての立ち位置もあります。たとえばラジオ各局の技術織が集まる会には普通に参加していますし、テレビ技術の皆さんとも飲む機会があります。営業は局が違えば敵、制作は局が違うと他人ですが、技術は結構仲良しなのでそれに甘えているという感じです。放送の技術職で電通大ブランドは強力で、後輩がどこかに入社すると話が流れてきます。私は今、早稲田と慶應ばかりの世界にいますが・・・。

アマチュア無線、電子工学関係の雑誌記事は制作に移ってからも書き続けました。単行本になったものもあり、共著や上下巻を全部数に入れると計19冊、最新刊は日本アマチュア無線機名鑑Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（CQ出版社）です。

後輩へのアドバイス

いろんなことに手を出して結局何も極めていない私ですが、一つ身を助けたものがあります。それは文章力です。技術時代には仕様が明確になることでトラブルを減らしコストを下げることができましたし、制作では宗教番組を担当した際に大いに役立っています。苦労しているとしたら放送用の口語と雑誌用の文語の使い分け。放送原稿はトーク用とニュース用でも違うのですが、とにかく文章力を磨いて損は無い！私はそう感じています。